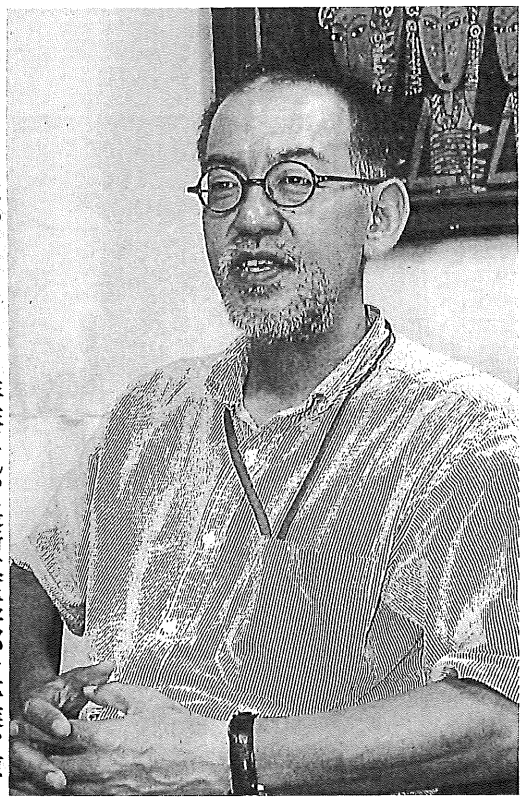
感染症との共生 探る

人類と病原体との関係を古代文明まで遡って考察した『感染症と文明――共生への道』（岩波新書）＝写真＝が出版された。著者の山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授はそのなかで、興味深い問題提起をしている。〈感染症のない社会を作ろうとする努力は、努力すればするほど、破滅的な悲劇の幕開けを準備することになるのかもしれない〉。執筆の意図について著者に話を聞いた。（臼山誠）

山本・長崎大教授新著

「根絶は解決ではない」



「感染症に対してどう医学を築いていくか。それは社会の哲学の問題かもしれません」と語る山本太郎・長崎大教授

結核、ポリオ、天然痘……。これら感染症の根絶、つまりウイルスや細菌など病原体の根絶は、人類に幸福をもたらすと長く信じられてきた。

しかし、山本教授は次のように話す。「私たちは感染症と闘って勝てると考えてきた。だが、いくら頑張っても、エイズ、SARS（新型肺炎）などの新しい感染症が次々に発生し続けている。私たちの考え方は正しかったのか」

国際保健学者である山本教授は、研究や対策のために、カリブ海のハイチやアフリカ各地など、さまざまな感染症がまんえんする地域をつぶさに見てきた。感染症のない社会を目指してきた現代医学への疑問は、そうした経験を重ねるうちに芽生えた。

「ある病原体を根絶することは、一つの病気から多くの人を救う。だが、人類史的な長い視点でみると、それで解決といえるのか。そう考える研究者が少しずつ増えている」

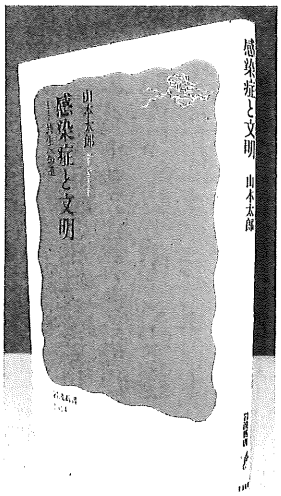
本書で、山本教授は考察の幅を数千年に広げる。メソポタミアなどの農耕文明は、感染症が恒常的に流行できる人口規模の社会を可能にした「感染症のゆりかご」だったと指摘する。はしかや天然痘などが、人間社会に定着し始めたのもこの頃だ。

中世ヨーロッパのペスト大流行は、東ローマ帝国の衰退を招き、封建社会を揺るがした。第1次世界大戦時のアフリカ、インド兵の大移動は、スペイン風邪の世界的流行をもたらした。人間社会の変化に応じて、流行する感染症も変わる。疫病を一つ乗り越えても、また新たな疫病に見舞われる歴史を、人類は繰り返してきた。

生態学的にみても、ヒトの体内の生態系に組み込まれた病原体を排除すると、その空白部分に未知のウイルスなどが入り込む可能性が高いと説く。人間社会から特定の病原体をなくすことは、私たちに免疫のない疫病が流行する土壌をつくることになり、〈次の悲劇の始まりに過ぎない〉のではないかと主張する。

では、どうすれば良いのか。本書では次のようなヒントを提示する。人間に寄生するウイルスは長期的には、強毒性から弱毒性へ変化していくと考えられている。人間が全滅するとウイルスも死滅するからだ。はしかなど、歴史上、悲惨な流行をもたらしながら、そのウイルスが人間社会の生態系に組み込まれ、免疫が広がり、あまり怖くない感染症になった例もある。

「眼前の一人一人の命を感染症から守ることは大前提。根絶を目指すのも一つの考え方だろう。でも、決して心地よいとはいえないが、感染症と共生する道を探ることが、21世紀の医学の課題なのではないかと、私は考える」



やまもと・たろう　1964年生まれ。長崎大医学部を卒業、京都大助教授、外務省国際協力局勤務を経て現職。著書に『ハイチいのちとの闘い』『新型インフルエンザ　世界がふるえる日』など。

文化 west 読書

読売新聞
2011年　9月3日（土曜日）32面